



吾道

Akiko Inoue 井上明子

本書は《立ち読み版》ですので作品の一部しか読めません。

天薄我以福、吾厚吾德以迓之。

天劳我以形、吾逸吾心以補之。

天阨我意遇、吾享吾道以通之。

天且奈我何哉。

天が我にわが福を薄くするなら、

我はわが心を厚くして対抗しよう。

天が我にわが肉体を苦しめるなら、

我はわが精神を樂にして補うようにしよう。

天が我にわが境遇を行きづまらせるなら、

我はわが道をつらぬき通すようにしよう。

かくすれば、天といえども、

我をどうすることもできないであろう。

「えー！？」

「そんなに驚かなくても」

「有り得ないよ、お母さん！」

母が突然、中国旅行をしようと言いだした。

「どうして中国なの？」

夏林^{かりん}は、これでもか！ という程、嫌そうな顔をして言った。

中国といえば、昔友達が行って散々な目に遭った、という話しが即、頭に浮かんだ。なんでもあの国、公衆トイレに囲いが無いらしい。つまり、丸出し。用を足しながら、隣で同じく用を足している人と会話する、という習慣があるとか。そんなところ、絶対に行きたくない！

「だってほら、このツアー安いのよ」

かき集めてきた大量の旅行案内パンフレットを夏林の目の前へドンと置き、母は、あっさりと言いだして返してきた。

「いや、そう言う問題じゃなくって……」

「二泊三日でたったの29,800円よ」

「そんなに安いの？」

夏林の趣味はアルバイトをしてお金を貯める事。通帳に貯まっていくお金を見る事が何よりの幸せ。金額を見ると、すべて時給計算するのが癖になりつつある。

29,800円の場合だと……時給が750円だから、割り算をすると、大体四十時間の労働分。土日に一日八時間のアルバイトをすることで二〜三週間分……うーん、確かに海外旅行ができる費用としてはまあまあ許容範囲かな。

「大丈夫？ こんな値段で海外だなんて。飛行機ガタガタのやつなんじゃないの？」

「そんな事ないと思うけど……」

母は分かりやすい性格だ。今の夏林の一言を物凄く気にして、パンフレットをあれこれ見直した。さらっとした真っ黒のシヨートヘアも、若干乱れ気味。

必死の検索の末、その内の一枚を手にとって、

「このツアーは、普段は5万円くらいのものよ」

と嬉しそうに言い返してきた。

パンフレットには、5万円の上に×をして29,800円と書かれている。それはそれで怪しげだが、面倒だからもう何も言わないでいた。

「ふうん」

夏林は、ひたすら疑いの眼差しで再度パンフレットを凝視してみる。安くなるには理由があるはず。しかし、今はもつと不思議な事がある。

「ねえ、どうしてまた急に旅行なの？」

旅行なんて、最近全く行ってなかったし、話題にすらならなかった。母の口癖は「家が一番良い」だし、仕事だって忙しいはずだ。母から旅行に行きたいと言いつつ出ずなんて、どう考えても不自然。またテレビでも見て影響されたのかな。あるいは、毎日働き尽くめの母の、ちょっとした息抜きなのかな、としか考えられない。

父は、夏林が中学へ上がる前に癌で亡くなった。それからは、随分質素な生活になった。母はずっと保母を続けていて、その収入が今の二人の生活の基盤となっている。

父が生きていた頃は毎年家族旅行もしていたけれど、それも自然消滅。母が、久しぶりに旅行をしようと言い出したのは、何となく深い理由がある様な気がするのだ。しかも海外、しかも中国！夏林の疑いの眼差しは、パンフレットではなく、母へ向けられていた。

「もう、じれったいな。たまにはペアとつと贅沢しよ！」

そういう問題でもないのだけど、母は明るくそう言った。父が亡くなってから、いつもどこか寂しげな母。けど、今日は違う。生き生きしている。若々しくも見える。贅沢したいのに、安い価格のツアー旅行、という所もいじらしい。

「仕方ないな。じゃあ、付き合うよ」

わざと素っ気無く、そう返事した。うちはいつもこんな感じだ。どちらが子供か分からない。やれやれと思いつつながら、夏林は旅行パンフレットをペラペラとめくった。

「とここでさ、中国って言っても広いじゃない」

「そうね」

「どこへ行くの？」

「どこがいい？」

「私が聞いているの。聞き返さないでよ」

「北京にする？」

母はさり気なく言ったが、元々北京に決めていたみたい。パンフレットはすべて北京のものばかり。

「北京で何するの？」

「何したい？」

「だから、私が聞いているの！」

母は、フフフといたずらっ子の様に笑った。

「色々あるわよー。お母さん、ここ行きたいな。よくテレビで映るでしょ」
教科書で見た事がある様な、ない様な、だだっ広いお城を母は指差した。

「何これ？」

「あなた、故宮知らないの？」

「知らない」

「もっと勉強しなさい」

「だって別に中国の城に興味ないもん」

母は軽蔑した眼差しを夏林へ向けた。と思うと、またフフフと笑った。

他にも、意外に母は北京の事をよく知っていた。アメリカの元大統領が宿泊したホテルはこことか、どこのお茶が美味しいとか、日本人に人気のある足つぽマッサージの店とか。

「いつの間に勉強したの？」

「夏林にまだ言っとなかったわ。お母さんね、北京の孤児院に毎月寄付金送ってるの。こう見えても、北京と縁があるのよ」

「何それ、全然知らなかった」

「それでね、今回、その孤児院へも行きたいのよ」

「北京にあるの？ 全員中国人？」

「当然じゃない」

「凄い。国際派ね、お母さん」

夏林は心底驚いた。母は、自宅と保育園と近くのスーパー、この三角形ゾーンからは出ていないと思ひ込んでいたから。

「一度は行っておきたい、と思っただの」

そう言いながら、母の目がキツとした大人の眼に変わった。

北京の孤児院は、母が勤める保育園ときつと何らかの関係があるのだろう。保母をしている母は大の子供好き。ボランティアの一環だろう。北京旅行の目的も

きつとそれだ。

母に対する疑問も段々とほどけていく。夏林は、母の事を誇らしくも感じた。疑問をそれ以上膨らます事もなくなった。

2

「夏林、これ、あんたのどこ入らない？」

「無理無理、こっちも一杯」

ビビットピンクの新しいスーツケースの上にまたがって、夏林は首を振った。

このスーツケースは、父が生きていた頃を買ってくれたやつ。一度も使う事なく、ずっと納戸にしまってた。やっと明るい太陽の下へ出る事になったとたん、下着やらカッターメンやらを、ぎゅうぎゅうに詰め込まれて、挙句の果てに、お尻や足で踏みつけられてる。ごめんね、お父さん！

「これは持っていきたいのよ」

母が、ぬいぐるみを差し出した。

「そんなもの、置いたら？」

「どうしてもあげたいの。可愛いでしょ？」

たった二泊三日の旅行なのに、スーツケースに隙間がない。

母のせいだ。母が孤児院の子供達にぬいぐるみを持って行くと行って聞かない。しかも、M A D E I N C H I N A。どうなっているのやら。

「お母さん、いい加減にして！」

「だって……」

「せめてかさばらないものにしてよ」

「かさばらないもの？」

「うん」

「あっ、そうか！」

「へ？」

「もっと早く言ってよ」

「はあ……」

時計は夜中の一時になっていた。時計の短針がもう一回りしたら北京にいる。

長い格闘の末、ぬいぐるみ達の大半は泣く泣く留守番になった。代わりに、家にあつた折紙を持って行く事にした。夏林が幼い頃に貰ったものだ。ついでに折紙の本も手荷物のリュックの中に入れた。鶴しか折れないのは、日本人として恥ずかしい。

「夏林、あれ持った？」

「あれ？」

「お守り」

夏林は手荷物リュックの奥に潜めてあつたお守りをチラリと見せた。

「ご心配なく。これは、肌身離さず持つてるんです」

「そうね」

「神様とかは信じないけど、このお守りだけは特別」

「特別な？」

「うん」

深い青で、巾着の形をしたその古びたお守りは、どここの神社のものかも分からない。毎年、一月か二月頃に、母が中身を取り替えてくれる。もしかして、母が自分で作ってくれてたりして。

例えハツタリのお守りであつたとしても、そんな事、夏林には関係ない。このお守りには、思い出がある。勿論母も知らない。言つても信じてもらえない。これからも誰にも言わない。

「これ持つてれば、飛行機絶対落ちないから」

そう言つてその場は取りつくろつた。明日からの旅行が、いつの間にか楽しみになつていた。心躍らせながら、母に話し続ける。

「でも飛行機ちよつと緊張するね」

「慣れないうちはみんな同じ」

母も調子にのるタイプ。自分だつて、初海外のくせに。

「よっ、国際派！」

笑うと体がポカポカした。心もポカポカした。

待つてる、北京！ 明日行くぞお。

出発当日。リビングにあるお気に入りの天窓から、夏林は空を見た。

「ゲゲーツ」

あいにくの雨。遠くから母が、

「ゲゲゲのゲーツ」

その返しが、やけにムカついた。

「最悪！ 行く気なくなるう」

「昨日でてるてる坊主、作るの忘れたからよ」

「この歳でそんなもん作れるかって」

夏林はふて腐れて呟いた。

「どうせ、電車乗って、飛行機乗って、向こう着いたら自動車 coming 来てるんだから。雨なんて関係ないのよ」

「折角の日なのに」

憎ったらしい空をもう一度見つめた。いつもより天窓が大きく感じた。

「それに、北京はきつと晴れてるわよ。この雨、北京から来てるんだし」
なるほど論理的だ。

「あ、そっか」

「そうよ」

「お母さん、さえてるう」

「でへへっ」

「でへへって……」

母と二人で初めての海外旅行。ワクワク感が一気に高まってきた。

「ほら、早く食べなさい」

母が用意してくれた目玉焼きと薄切りハムがのったトーストは、香ばしくてコーヒートよくあった。

夏林が食事をしている間、母は食事もせずに、荷物の最終チェックをしていた。今日の母はいつもよりお洒落をしている。しっかりお化粧もしている。若干中年太り気味だが、背も高く顔が小さい母は、こうして見ると、どこかの商社のキャリアウーマンの様に見える。いや、確かに保育士のキャリアを持つウーマンなのだ。

「パスポート持ったわよね？」

「持った！」

夏林はトーストを頬張りながら答えた。

「どこに入れたの？」

「もう、何度も見せたでしょ」

夏林はコーヒーを口に流し込むと、手荷物用のリュックの中からゴソゴソとパスポートを探った。

「そんな奥にしまってたらダメよ。もっと取り出しやすいところにしなきゃ」

「取り出しやすいって事は、盗まれやすいって事よ。お母さん、日本では良いけど、海外へ行くときは、念には念を入れなさいと」

それにしても、なかなか取り出せない。母の言う事も一理ある。

やっと、手先にそれらしきものが触れた。

「あった、ほらね」

夏林はパスポートを何気なしに開いた。

母も自分のパスポートを広げて、隣へ並べてきた。

夏林と母は、顔が全く似ていない。

けれども、パスポートには、夏林が日本国民である事を証明する内容と、確かに母の娘である事が、しっかりと刻まれていた。親子なんだから当たり前かっ。

でも当たり前前って一番怖い。父が亡くなった時、その当たり前前が、ある日突然ひっくり返った。父は傍にいてくれて当たり前前だと思っていた。当たり前前なんてこの世では長く続かない。

夏林は母の子供で日本人。急にパスポートが愛おしくなって、ぎゅっと握り締めた。

「お母さんのも私が持つってあげる」

「どうしたのよ、急に」

「いいから」

夏林は、母のパスポートと自分のを重ねて一つにし、大事にリュックの中へしまった。

吾道 《立ち読み版》

著者……………井上明子

© Akiko Inoue 2007

発行……………虹路^{こみち}

<http://www.rainbowroot.com/>

発行日……………二〇〇七年三月十日

本書は著作権上の保護を受けています。このテキスト及び画像のいかなる部分も、著者の承諾を得ずに、電子的・機械的に複写・複製することは禁じられます。